

短期海外研修での学びの考察と課題

- 海外フィールド演習（北米プログラム）を例に -

中 朋美*

Examination of Student Learning Through Short-term Study Abroad Tours: A Case Study

NAKA Tomomi*

キーワード：海外研修，異文化体験，地域学

Key Words: Study abroad, Cross-cultural experiences, Regional Studies

I. 地域学部海外フィールド演習

グローバルな人やものの動きが活発化する中、普段の学びの場所から一步踏み出し、海外での体験や調査を高等教育の一部として組み込む動きが広がっている。鳥取大学地域学部でも海外フィールド演習という形で、10日間程度の海外研修を実施している。この研修は2010年度から試行的に実施され、2013年度には専門科目として組み入れられている。研修の実施場所ごとにプログラムとして企画され、その内容は、その時々々の社会事情や担当教員等との調整により異なる。しかし演習の共通した目的の一つには地域学部での学びを生かし、海外においても地域学の視点を取り入れて調査や研究をする演習の場を提供することがある。地域学という枠組みを重視している点で、海外フィールド演習は、その他の鳥取大学の協定校への留学や語学研修とは異なる特徴を持っている。

さて、多くの海外研修が行われている中、海外での学びがどのようなものかを探る研究も数多く論文として出版されている。一般に海外滞在が1年以上の場合、長期の研修とされ、それより短いものが短期研修と表現されることが多い。そこでここでは、短期の海外研修参加学生の学びについての国内外の研究での論点を踏まえ、2018年度に実施した北米プログラムの体験者の考察を行う。海外研修のスタイルはさまざまであるため、その実態の把握や調査を比較し、論点を整理するのは容易ではない。また単年度の研修参加者の分析だけでは不十分な点も多い。しかし先行研究等で指摘のある課題をどのように取り組んでいくかの可能性を少しでも示すことができればと考える。

II. 海外研修の学びの研究の主な論点

留学や短期研修がどのくらい行われているかを正確に把握することは難しい。これは、海外での学びといってもその形態は様々であること、またそういったデータをどこが、どのように集約するのかといった問題点があることと関連する。しかし近年の一般的な傾向として、海外研修の参加者、特に短期研修参加者の割合が増加しているといわれている。たとえば、Institute of International Educationの統計(Nguyen, 2017)によると、海外での学びは増加傾向を示しており、中でも短期研修は過半数を占め、2016年では63.1%であったとの報告がある。

増加傾向にある海外研修の中で、短期研修が近年の主要な海外での学びとなっているには様々な理由が考えられる。その主なものとして、長期と比べて費用がかからず、時間的制約が少ないことから学生の負担が少ない点、またこれと関連して短期研修は所属機関のカリキュラムの一部とし組み込みやすいこと、そして参加者が研修によって卒業時期をずらす必要が少ないといった点でより参加しやすいのではないかと指摘がある(Gaia, 2015)。

このように近年主流となっている短期海外研修であるが、そこでの学びを考察するにはいくつかの課題がある。まず研修の多様な実態をどう考慮するのかという点がある。短期研修はそれが実施される期間、実施の主な目的、実施形態、単位認定等の所属機関との関わり方などが異なる。このため短期海外研修の効果をまとめて分析することが適切かどうかや、一つ一つの研修での考察がどの程度他の研修にも当てはまるかという点で研究の考察やその結果の評価が難しい(Kartoshkina, 2015)。

また海外研修での学びを評価する指標にも課題が

* 地域学部地域学科国際地域文化コース

ある。研究者によりさまざまなモデルや指標が提示されてはいるものの、そのどれが、どのような場合において適切かという点について、議論が展開中である。たとえば海外研修体験での学びを評価する際に、しばしば *intercultural sensitivity* (異文化感受性) の変化が指摘されている (たとえば Anderson 2006)。しかし、その変化を図る指標や基本モデルには確立されたといえるものが少なく、またそのどれが最も適しているのかについての議論が続いている。加えてその指標が、たとえば学生の所属する高等教育機関や研修先の文化や言語が異なる状況で、どの程度利用可能かについても検討が行われている最中である (Wang & Zhou, 2016)。このため各研究の成果をどのように解釈すべきかについての判断が難しい。

このほか、調査の際のサンプルの問題もある。対象となる短期の海外研修参加者の数が比較的限られているとの指摘 (Nguyen, 2017) や、研修の期間や目的がさまざまである研修の参加者を同じように調査の対象として扱うことに対しての問題を指摘するものもある (Gaia, 2015, Coker et al., 2018)。これらの点は、統計による量的な調査で参加者の体験や学びをどのように比較、検討し、傾向を把握できるのかについての課題とも関係する。

このように短期海外研修の学びの研究には多くの制約や課題があるが、しばしば短期研修での学びについては以下の指摘がみられる。まず海外での学びの体験は、程度の差はあるものの、異文化に理解を深め、異文化に対する感受性を高めることがあるとの指摘がある。浅野 (2015) は、その中で特に異文化の受容についての3つの変化を指摘する。それらは訪問国や人に対するイメージの変化、国際理解の変化や視野の変化、そしてコミュニケーション力の変化である。もちろん短期海外研修の全てがこの3点の変化をもたらすわけではない。たとえば語学研修はコミュニケーション力の変化と主に関係するだろうし、語学の習得を主たる目的としない海外研修においては、訪問国や国際理解と深く関連すると考えられる。

また海外での学びの影響は研修期間の長短に関係するのかという点の研究もなされている (Coker et al. 2018; Dwyer, 2004; Gaia, 2015; National Survey of Student Engagement, 2007)。たとえば異文化理解の深化や異文化に対する感受性を高める傾向は、数週間程度のより短い研修でも見られるとする調査結果がある (Gaia, 2015)。これらの研究では研修期間が短くても、学びの成果はある程度あるとの指摘が多い。もちろん長期留学や研修と同様の効果が短期研修で

もあるとはいえないが、短期でなければ海外研修に参加が難しい学生もいることを考えるとその学びは重要なものであるともいえる。

さらに海外研修での学びを考察する方法に関して、量的な調査だけでなく質的な調査の必要性も指摘されている。たとえば、Kartoshkina (2015) は、学生の自己の文化に対する考えの再認識の様子がインタビューを交えた方法によって分かったことを指摘し、質的な調査方法を取り入れる必要性を訴えている。このほか海外研修による知識や学びの進展の様子の考察には、研修前後といった複数回にわたる詳細な聞き取りや学生の振り返りの機会の提供が重要であるとする研究もある (Czerwionka et al., 2015, 泰松, 2017)。

まとめると短期海外研修の実態は多様であることから、その考察は容易でないことがわかる。しかしこれまでの研究によると、よりよく研修での学びを調査するためには、研修の目的、形態の多様性を考慮することがカギとなっていることがわかる。また学びの考察には量的な調査だけではなかなか十分な考察ができない場合もあり、質的な調査による考察の重要であることも指摘されている。さらに、一度の聞き取りのみならず、研修前後といった複数回の聞き取り調査や学生自身の振り返りの機会を与えることによって、学生の学びの変化のプロセスの考察の手掛かりを得ることができるとの示唆もあることがわかる。

以下ではこのような指摘を踏まえつつ、2018年度に実施した海外フィールド演習の北米プログラムを考察する。学生たちが海外での学びをどのようにとらえているのかについて、聞き取りやグループディスカッション、学生のエッセイ等を手掛かりに探っていく。

III. 2018年度北米プログラム

1. プログラム概要

北米プログラムでは現地での研修での学びをより充実したものにできるように、現地研修前後に勉強会などさまざまな活動を毎回組み込んでいる。2018年度は、10月に参加者説明会を開始し、その後11月から昼休みを中心とした2週間に一度ほどの勉強会、そして出発前の個別面談、実際の研修旅行とその後の課題提出、聞き取り調査を行い、評価を行った。また2018年度の海外フィールド演習参加者を主な対象として、2019年度に海外での学びを鳥取で発信する地域フィールド演習を開催した。北米プログラムでは希望者の4名が参加した。

海外研修の現地では、多文化社会アメリカをテーマに、サンノゼ、デービス、サンフランシスコ、ホノルルを訪問し、各地で施設訪問、聞き取り調査等を行った。訪問先には日系センターや博物館、GLBT博物館、ポリネシア・カルチャー・センターなどがある(表1参照)。前年度からの変更点として、学生主体のグループリサーチの追加、ホノルルにてポリネシア文化や周辺の民族についての学習を加えたことがあり、多文化の考察をより広く行った。

表1 2018年度北米プログラムスケジュール

2/28	サンノゼ	日本出発	サンノゼへの移動とオリエンテーション
3/1			ジャパントウンの見学と調査
3/2	デービス		デービスのまちのオリエンテーション
3/3			サクラメント見学及び地域の教会や施設訪問
3/4			デービス校のオリエンテーション、学生による現地調査
3/5			デービス校の施設訪問、学生による現地調査
3/6			学生による現地調査、ファーマーズマーケット見学と調査
3/7	サンフランシスコ		サンフランシスコへ移動し、現地オリエンテーション
3/8			サンフランシスコジャパントウン訪問
3/9			カストロ地区、ヘイトアシュベリー地区訪問調査
3/10			黒人ゴスペル教会訪問、調査
3/11	ホノルル		ホノルルへ移動、オリエンテーション
3/12			ポリネシア・カルチャー・センター見学、調査
3/13-14	日本帰国	ホノルル	ホノルルから関空を経て鳥取に移動、最終振り返り

2018年度の参加者は12名で、内訳は表2にある通りである。3コースからの参加者(国際地域文化8, 人間形成3, 地域創造1)があり、また2年生に加え1年生の2名が参加した。今回の参加者の研修以前の海外経験はさまざまである(表3, 4, 5)。海外に一度も渡航したことがない学生が半数(6名)を占めた一方、複数回の海外渡航経験をもつもの者も1名いた。渡航先は、韓国(2名)、マレーシア、台湾(各1名)で、アメリカに行ったことがある参加者はいなかった。渡航形態は個人や家族旅行(2名)、高校の修学旅行(2名)、鳥取大学の他の語学プログラム参加(2名)であった。

表2 2018年度参加学生の内訳

コース	男性	女性
国際地域文化	2	6(2)*
人間形成	0	3
地域創造	1	0

*括弧内の数字は1年生参加者

表3 2018年度参加学生の海外渡航経験

海外渡航経験	人数
なし	6
1回	5
2回以上	1

表4 2018年度参加学生の渡航経験

海外渡航の形態	人数
鳥取大学のプログラム	2
高校の海外研修	2
家族旅行	1
個人旅行	1

表5 2018年度参加学生の海外渡航先

海外渡航先	人数
韓国	2
台湾	1
マレーシア	2

2018年度は、参加者全員が学部改組後の新カリキュラムでの学生であった。そのこともあってか国際地域文化コースの学生の参加理由は以前とは少し傾向が変わり、海外に行ってみたくてという各自の思いと大学での学びを関連させたコメントがみられた。例えばある学生は、

国際地域文化コースが主催しているもので、アメリカに行く機会がそれほどないと思ったし、ちょっとでも英語が常に使われている環境に身を置いてみたかった。

と参加の理由を述べた。このほかに国際地域文化コース所属であるので、海外経験を積みたいと思ったからと答えた学生が2名いた。

またすでにほかの海外プログラムの参加を考慮しており、それらのプログラムにつながる一つのステップとして参加したという学生も3名いた。学生の中には北米プログラムの参加以前にマレーシアの語学プログラムに参加した者もいた。また北米プログラムのあとに、国際地域文化コースで東アジアプログラムに参加しようと思うと答えたものがいた。2019年度末時点で参加者にフォローアップの聞き取りをしたところ、北米プログラム参加後に大学関連のプログラムでメキシコや東アジアへ渡航した学生が2名いた。

以下では個別面談やグループでの振り返り、エッセイ等から参加者がどのように海外での体験を語っているのかについて、現地研修前、研修中、研修後と研修後半年後に分けて紹介する。

2. 現地研修前のコメント

2019年1月に個別に面談を行い、渡航経験、研修参加理由、抱負などについて個別に聞き取りを行った。2018年度の参加者全員が初めて渡米することもあって、研修前のコメントではアメリカの社会や文化に対する興味、アメリカ（あるいは海外渡航未経験者では海外）に行ってみようとの声が多かった。これらのコメントは漠然としたものが多く、具体的にアメリカの文化や社会の何に興味があるかというよりも、とにかく現地に行ってみようという気持ちを中心としたものであった。

たとえばある学生は参加理由を聞かれて、

大学生活の内に、留学とか海外に行ってみようと思ってはいたのですが、自分だけで行くのはちょっと怖いと思って。で、大学のなんかそういうプログラムみたいなもので参加してみようというのがありました。

と語った。このほかアメリカや英語圏に行きたいという思いがあって参加したと話す学生も複数いた。勉強している英語を現地で試してみたいといった声や、韓国や中国といった国々は、比較的近く、渡航

費用の面でも個人で今後行くことができるが、アメリカはそうではないので、この機会に訪問したいとの声が多かった。

先ほどの学生のコメントにもあるように、学部の授業として、教員が企画し、一緒に行くことで、参加してみたいと語る学生も多くいた。海外渡航経験が浅い学生にとっては、教員が企画・手配している研修旅行に対しある程度の安心感を得るようである。この点は、現地に行くことに対する漠然とした不安がしばしば最初の面談で出てきたことも関係するだろう。この時点での面談では銃社会と聞いているので少し不安である、カバン等が盗まれたりしないかどうか心配だとの発言をするものもいた。一方でこういった不安はあるものの、実際自分から現地の状況を調べたり、ニュースをチェックしたりといったことはうかがえなかった。

プログラムでの抱負についても同じような傾向がみられた。学生からはいろいろな人と話してみたい、多様な人々の様子を見てみたい、異文化に触れたいといったやや抽象的なコメントが多く、ひろく現地での様子を体感したいことに興味の中心があることがわかった。たとえばある学生は何をプログラムでしたいですかとの問いに、

はじめての海外なので、全部がなんか新しい経験となると思うのですが、英語圏の人、現地の人といっぱいしゃべりたいというのがあります。

と答えた。具体的に何を話したいかと尋ねたところ、普通の日常会話をしたいとの答えだった。ほかの学生からもアメリカの雰囲気を味わってみたいとの声が聞かれた。具体的にははっきりとは表現することが難しいが、現地での体験に対する期待があることがうかがえた。

このように参加前の学生のコメントの傾向として、初めてのアメリカ渡航に際し、漠然とした憧れがあり、現地に行くと人々と出会うことによって雰囲気を味わいたいとの思いが浮かび上がった。具体的な現地の事情についてはあまり自主的には調べていず、一般的なニュースなどからの情報に頼っている様子もであった。すでに勉強会で訪問先等の下調べを開始している段階ではあるものの、そのほかの授業や行事で忙しいためか、それ以上の準備は限定的であった様子であった。

2. 研修中の振り返り

研修中は各学生が毎日書き記した日記形式の記録と期間中に3度、口頭での振り返りを行った。日記は事前に参加学生に用紙を配布し、毎日書き留めるように指示したものである。口頭による振り返りについては、出発から最初の訪問地であるサンノゼでの行程を終えデービスへの移動を終えた3月3日に1回目を、デービスでの日程を終えた8日に2回目を、そして全行程を終了し帰国直前の14日に3回目を行った。この振り返りでは、参加者と教員が集まり、一人一人がそれまでの研修での体験について述べる形式で行った。参加者は発言者の言葉を静かに聞くことが促され、ほかの人は発言者のコメントが終わるまで意見等をのべることを控えた。研修中の振り返りでは、日々の体験を通じて学生たちの気づきの語りを中心になっている。そこでの内容をみると、日本について、大学での学びについて、アメリカについての3つの大きなテーマが浮かび上がった。

まず学生から出てきたテーマの一つは、自分の知らない「日本」があるとの認識である。アメリカでの体験によって、自分が知っている、あるいは当然と思っていた日本や日本人としての考えを新たにしたりと語った学生が多くいた。たとえばある学生は事前学習でアメリカにきた日本人移民の歴史や彼らの苦労やそのほかの体験などについてすでに学んではいたけれどもと述べた後、

(現地ではいろいろな施設や人々から話しを聞いて)日本人として知っておかなければいけないことをアメリカの人が知っていて、自分が知らないというのは、やっぱり恥ずかしいことだと思ったし、まだまだ勉強しなければいけないと思うことがたくさんありました。

と語った。このようなコメントは、今回の研修で文化的なルーツの捉え方の多様性を考察するための一つの方法として、アメリカにおける日系移民の歴史を事前勉強で取り扱い、現地では日系移民関連の施設を訪問したことと関連する。学生の多くは研修参加前には、日系移民の話や第2次世界大戦時に行われた日系人の強制収容についてほとんど知らなかった。そのためもあってか、学生は事前の勉強会でも、そういった歴史体験についてあまり身近なものとして深く感じる事がなかったのかもしれない。しかし実際に現地で日系の人々から様々なお話を聞くことによって、そういった歴史が、当時だけでなく現在においても何らかの影響を与えているものであることを感じた学生もいたようである。

数人の学生はサンノゼの日系博物館でガイドとして出会った若い女性が、一生懸命に日系アメリカ人の歴史を説明してくれたことが印象に残っていると語った。ある学生は、日系の歴史を一生懸命語るガイドの様子をみて、日系アメリカ人の歴史やそれを知る重要性を伝えてほしいという熱意を感じたと語った。単なる情報として捉えていた歴史が、このように人を動かしているのかといった点が記憶に残ったようである。また自分たちとほぼ同世代のガイドの人が、当時の状況と、そこから現在のアメリカ社会の文化的な多様性を考えていくことの重要性について語っていた点が、記憶に残ったようである。

また別の学生は、

事前学習でインターネットや本を読んでいたんですけど、それとは違った深さを、実際に日系人の人と出会って感じました。

と語った。知識としての日系アメリカ人の歴史は理解していたつもりであったが、現地でいろいろな方と話を聞いてみることで、違った側面から考えるようになったようである。そしてこの学生は続けて、

見た目は日本人なんですけど、ペラペラと英語をしゃべっていて、なんか(自分と)似たところとアメリカ人の側面とがあって、2つの国民性を持った人に会っているような感じがしました。

と続け、自分が思っていた日本にルーツを持つ人々と実際に出会った人々との違いや、アメリカの人といっても多様な人々がいることを感じた様子がかえりが出る。そして自分が当然持っていると感じてしまいがちな文化的ルーツを、別の視点から捉えることができたようである。

この新たな日本の歴史や文化の認識は、デービス校での学生との交流によってさらに別の観点からも深められたようである。デービス校では日本語を学ぶクラスに数回参加し、現地の学生とともに時間を過ごした。デービス校の日本語クラスの学生と接する中で、日本語を単に学ぶだけではなく、さまざまな視点から日本の社会や文化について興味を持っている学生も多いと感じ取った参加者もいた。好きな小説家や漫画について話し合った際、日本から来た自分たちの知識を上回るデービス校の学生の日本社会や文化に対する関心に驚いた学生も多い。そしてその驚きは、日本に対する関心を持ってくれて

いることに対する喜びと驚きといった感情とともに、自分たちが知っていると思っていた日本についての認識を新たにしようである。

2 つ目に出てきたテーマは、大学での学びについての再認識である。学生のコメントからは自分たちの日本についてだけでなく、大学での学びについても認識を新たにしていることがうかがえるものが多かった。デービスの大学生が一生懸命勉強している姿が印象に残ったという参加者が多くいた。たとえば、日本語の教室では、日本語を学んで半年ほどの現地学生と会話する機会を通じて、たった半年でここまで日本語を使うことができることに驚いた学生もいた。またデービス校では、日本語を学ぶ学生だけでなく、キャンパスをガイドしてくれた学生やグループリサーチを通じて知り合った学生との出会いがあった。そういった学生たちとのやりとりの中で、課外活動やバイトといった他のスケジュールと折り合いをつけつつ、授業に取り組んでいる現地学生を知ることができた。彼らの姿から、大学で学ぶことについて考えた参加者が多い。ある学生はデービス校の訪問を終えて、

すごくいい刺激を受けました。一生懸命日本語を勉強しているアメリカの方がいて、勉強しているからたどたどしいですが、すごく積極的に日本語でしゃべろうとしてくれていたその姿に、自分ももっと英語でガンガン話しかけないといけないなと改めて感じました。ほかにも UC デービスの学生さんっていつでもどこでもパソコンとにらめっこして勉強している姿が見受けられて、自分の大学生活というのを見直すよいきっかけになったのかなと思います。

と感想を述べた。もちろん、デービス校においてもすべての学生が同じように学業にしっかりと取り組んでいるわけではないだろう。しかしデービス校での訪問は大学生活を違った観点からみる機会を与え、自分たちがもはや普通と感じている大学での生活を再認識する場ともなったようである。

3 つ目のテーマとしては、アメリカについての印象の変化がある。出発前のコメントでは、学生はアメリカには行ってみたいとは思っているものの、現地の事情等の知識は限定的であった。このためもあって、学生はアメリカといえば銃社会といった漠然とした不安を持っている人も多かった。これと比較して研修中の学生のコメントをみると、そういった漠然性が少しずつ薄れ、より具体的で、また多様な

アメリカ社会といった認識が登場してきた様子がわかる。学生たちの中には、はじめは現地の人々と会話するのに躊躇を感じたものがかなりいた。しかしデービス校やサンフランシスコの町で、日々の買い物などで会話をする機会を積むことによって、漠然とした「怖さ」が薄らいだようである。多くの学生は現地の人々が気さくに会話に応じ、辛抱強く、また親切に自分たちの英語に聞き入って対応してくれている点が印象に残ったと語った。特にデービスは、大学町であって留学生も多く、多様な英語にも柔軟に対応してくれる人々が多い。このため学生の中では、自分の方から積極的に伝えようとしなければ、と感じた学生が多かった。実際にはうまく英語が口から出ず、伝わらないという経験を積んだ学生もいた。しかしそうしたもどかしさよりも、自分から伝えようとする努力の必要性和それに応じてくれる現地の人々の対応が記憶に残ったようである。ある学生は、

なんかアメリカ人の印象がすごくかわりました。なんかすごくみんなフレンドリーなだけじゃなくて、すごく親切で、本当にとってもいい人ばかりで、いろんな人と話することができて楽しかったです。結構自分からお店の人たちに話しかけたり、いろんなことを質問したりすることができたのがすごくよかったです。

と語った。こういった出会いは些細なものかもしれないが、漠然としたアメリカ人から、もう少し具体的に多様なアメリカの人々への捉え方の変化につながるものともいえる。先に述べた日本社会や文化に興味のあるアメリカの人、一生懸命大学で学ぶ学生、親切な町の人、といったようにいろいろな人との出会いも、アメリカといった国や社会に対する考えを新たにできる機会となった様子がわかった。

3. 研修後のコメント

研修参加者とは 2019 年 4 月に再び個別に面談をして、研修での体験を振り返ってもらった。現地研修から 1 ヶ月から 1 ヶ月半経過してからの面談である。新学期も始まり、学生たちの多くは日々の生活のリズムに戻ってきた頃で、アメリカでの体験を少し離れた感じで、なつかしく思い出す学生が多かった。彼らのこの時点でのコメントでは、自分が以前に考えていたアメリカとの違いの気づき、そしてそういった多様な社会に対して、目を向ける必要があ

ると感じたとの声がよく聞かれた。

たとえば、ある学生は sacrament であったホームレスの人々について述べ、自分が思っていた以上にホームレスの人々がいた点を述べた。

本当に自分の目で見てみないと…想像しているものと違うものもあったし、行ってみないとわからないなと思ったのが一番ですかね。あまりホームレスの人のことなどは考えていなかった。(中略) sacrament とか結構ホームレスの人がいたじゃないですか。なんかそれは全然知らなかったから。あそこまでいっぱいいるとは知らなかったの。本当にびっくりしました。

一見華やかな街と思っていたサンフランシスコや sacrament で、予想とは違う光景が心に残った様子がうかがえる。それとともにこの学生は、出会った人々は気さくな人も多かったと述べた。そしてそのことからこの学生は、銃社会で怖いといったアメリカに対するイメージは必ずしも正しくないと感じたと語った。話しかけられたり、逆に自分から話しかけ、相手がそれに応答してくれたりすることが現地では多く、その経験から一概にアメリカの人々をひとまとめにすることはできないと感じたようである。

別の学生は研修で訪問したサンフランシスコのカストロ地区やサンノゼのジャパントウンでの人々との出会いに触れ、そういった人々との「パーソナルな出会い」が思い出に残ったという。この学生は、そういった出会いが、自分の以前想像していたこととは異なっており、そこから現地に「行ってみないとわからない」という印象を受けたと語った。また今回の研修では4都市を訪問したことに触れ、アメリカといっても地域の特色があることを感じたという。

このように研修後のコメントは、2週間の現地体験をもとに、実際に訪問することで得ることのできる視点の重要性と、そこから彼らなりに感じた現地の文化や社会の多様性やその複雑性に言及するものが多かった。そしてそうした体験を振り返りながら、自分たちがまだよくわかっていない物事存在を意識し、もっと海外や国内の出来事にも目を向ける必要があるとの気づきを述べた学生が多かった。

4. 研修終了後から半年経過地点での振り返り

2019年度ははじめての試みとして、海外フィールド演習の体験を鳥取で発信し、そこでの学びを考える地域フィールド演習を行った。国際交流の歴史や

や鳥取での国際交流の現状に関するレクチャーの後、毎年鳥取市で開催される国際交流イベントのタイムフェスティバルにおいてブースを出した。ブースを出展するにあたっての準備は2018年度に海外フィールド演習のベトナム、インドネシア、北米のプログラムの参加者ごとに行った。以下では2018年度北米プログラムに参加し、この地域フィールド演習にも参加した4名の学生の最終エッセイと参加時の様子から考察を行う。そこからは参加者が北米プログラムでの体験をどのように他の人々に発信するかについて模索している様子がうかがえる。

学生の多くは体感として現地と日本の違いを感じたものの、それを現地に行っていない来場者に伝えることに対して難しさを感じたようである。たとえば、準備段階でどんな例が日本と現地での違いをうまく表すことができるかを話し合った際、アメリカでのチップをわたす慣習や食べ物の大きさの違いをあげた学生がいた。これらは、学生にとっては現地ならではの「体感」を象徴するものであるが、イベント来場者にとってはそう感じてもらえるとは限らない。むしろチップや食べ物の違いを単に絵や言葉で表してしまうと、単なるそして些細な「違い」として捉えられてしまいかねない可能性がある。また同じブースの参加者のベトナムやインドネシアのグループと比べて、アメリカ社会や文化は比較的なじみのあるものだけに、現地でのカルチャーショックを感じた「違い」をうまく、しかもステレオタイプの極端な一般化を避けながら伝える方法を見つけるのは大きな課題となった。

結局当日は、学生が体感したという「感じ」を伝えるよりも、訪問先の様子などアメリカの一般的な説明など学んだ情報を伝えることが中心となった。幸いにもブースには多くの方が立ち寄り、その場で来場者と言葉を交わす機会を持つことができ、個別に説明を加えたり体験を話したりすることができた。イベントの後、学生からは来場者と直接会話を持つことができよかったとのコメントが多く聞かれた。その反面、やはり2週間での体験を語ることの難しさを感じたようである。

こういった学生の様子からは海外での学びをどのように伝えるのかについての難しさの一面がうかがえる。海外での発見や驚きは、参加者同士であればある程度共通の理解がある場合が多い。しかしそれを研修に行ったことがない人に伝えるのは容易ではない。そしてそのことが海外での学びや体験を継続的に振り返ることを難しくしているのかもしれない。たとえば現地でいろいろな人と出会いや、それによ

って得られた気づきも、ある程度理解をしてくれる友人との会話や、そこでの体験や振り返りを深める授業といった機会がなければ、個人の体験や思い出として終わってしまう場合が多いだろう。今回ここで見られたものと同じような指摘は、以前行った北米プログラムの参加者の研修2年後のインタビューでもみられた。せっかくの海外研修の体験や気づきも、それを思い出すことが少なくなり、振り返ることがなくなってしまいがちの傾向があるようである。研修の体験をできるだけ継続的な学びにつなげる動機付けとして活用することができるのかが今後の課題の一つといえる。

IV. 北米プログラム参加者の振り返りから

ここまで学生のコメントを手がかりに、2018年度の参加者の学びの様子を、現地での研修前、研修中、研修1ヶ月後、研修半年後に分けて紹介してきた。研修参加の動機や海外渡航経験は参加者間で違いがあり多様である。しかし彼らのコメントからは、そこでの学びが徐々に研修を経て変化していく様子うかがえる。研修前の漠然としたアメリカの人々や文化に対するイメージが、学生の予想に必ずしもそぐわない形で具体性を帯びてきていた。怖い銃社会にいたと思っていたアメリカの人々の中には、案外気さくに自分たちの問いかけに応答してくれる人々がいること、自分たちがそれまで知らなかった日本社会や歴史の側面に出会い、それがアメリカにいる人たちとの生活とも深く関わっていること、大学生といってもその学びの様子や将来のビジョンに大きな違いがあること、といった気づきが見られた。これらは参加者にとって新しい発見であり、彼らが普段何気なく想定していたことが必ずしも正しくないことへ気づきにもなっていた。学生の「行って見て見ないとわからない」や「やってみてみないとわからない」といった言葉にあるように、社会や文化の多様性を想像し、多角的で重層的な考察の大切さへの認識へとつながっている様子うかがえる。

今回の北米プログラムでの参加者の学びの様子は、先に紹介した海外研修に関する研究での指摘といくつかの点で関連させることができる。海外研修は異文化への感受性がより高くなり、それによって異文化への関心や理解の深化につながるなどの指摘（たとえば浅野，2015）があったが、北米プログラム参加学生も、アメリカ文化や社会に対する認識が、より具体性を帯び複雑性を持ってきている様子うかがえる。加えて、Kartoshkina (2015) の指摘にあるよう

に、自己の文化や社会への認識も変わってきている。日系アメリカ人や現地の大学生との出会いによって、北米プログラムの参加者もいままで自分たちが知っていると思っていた社会や文化に対する認識も新たにしている。

さらに Czerwionka et al., (2015) や泰松 (2017) が指摘するように、学生のそういった気づきや学びは、数回にわたって学生のコメントを考察することで、より深く知ることができることもうかがえる。今回の振り返りからは、様々な参加動機や渡航経験を持つ学生たちは、それぞれ異なるきっかけやタイミングで、気づきを得ることが多いことがわかった。たとえば北米プログラムでは、前半に日系アメリカ人の歴史や体験を聞く機会が多かったが、そこでの印象は、研修後半になると背景となって前面に出てこない場合が多くなった。また学生によっては、時間が経過するにつれ、自分の気づきを的確また具体的に言語化できない学生もいる。これらの点から学びや気づきの考察には、そのプロセスを重視し、研修を通じての学生の考えや体験を記録し、検討する工夫も重要である。

そしてこれらのことに加え、今回の考察からは海外研修の学びをさらに深めるためには、帰国後のカリキュラムの工夫の重要性がうかがえた。研修半年後のコメントでは、海外での気づきをほかの人たちと共有したり、気づきから何らかの持続的な行動に移したりすることがなかなか容易ではないことがわかった。タイムフェスティバルの参加学生が体験したように、したことや新しく得た知識は比較的伝えやすいが、その背後にあった体感や気づきは、研修参加者でない人に伝えるのが難しく、参加者個人の心の中にしまっただけである。ほかの知人や周囲の人に伝えられなければ、体験での気づきを評価し、その後の学びに続けていくことも難しいものとなるだろう。

語学研修ならば、その後の語学力の向上につなげるといった次なる目標を立てやすい。しかしそのほかの研修では工夫が必要となる。特に海外でも地域やコミュニティについて調査する視点を育むといった地域学部の海外フィールド演習では、次なる目標を見つけることは簡単ではない。しかしせっかく得た海外での学びや気づきをさらに生かすためには、現地での学びを継続的に振り返り、自分たちの学びを次につなげていく方法について検討する機会が大切であるように思われる。もちろん学生の中には研修中の気づきを、その後の大学での授業やゼミでの研究につなげていく学生もいるだろう。しかし学生

の中には、研修中の気づきを、帰国後の日常生活での忙しさの中に埋もれさせてしまうこともあるだろう。研修とその後の大学での学びをつなげていけるような仕組み作りやサポートの工夫が必要であると思われる。

今回事例として取り上げた 2018 年度の海外フィールド演習では、帰国後に海外研修での体験を鳥取の人々に発信する地域フィールド演習を通じて、こういった課題がより明らかになったといえる。参加者の中にはそれぞれの事情により、地域フィールド演習に参加できなかった学生も多く、また演習の形態にも今後工夫が必要である。引き続き、海外フィールド演習を帰国後に組み込んでいく方法を模索していくことで、海外研修の学びを継続的なものとする事ができればと考える。

引用文献

- Anderson, P. H., Lawton, L., Rexeisen, R.J., & Hubbard, A. C. (2006). Short-term study abroad and intercultural sensitivity: A pilot study. *International Journal of Intercultural Relations*, 30, 457-469.
<https://dx.doi.org/10.1016/j.ijintrel.2005.10.004>
- 浅野昭和 (2015) 「マレーシア研修旅行が大学生の異文化理解及び訪問国のイメージに及ぼす影響」『中央大学人文科学研究紀要』81, 1-24.
- Coker, J. S., Heiser, E., & Taylor, L. (2018). Student outcomes associated with sort-term and semester study abroad programs. *Frontiers: The interdisciplinary Journal of Study Abroad*, 30 (2), 92-105.
- Czerwionka, L., Artamonova, T., & Barbosa, M. (2015). Intercultural knowledge development: Evidence from student interviews during short-term study abroad. *Journal of Intercultural Relations*, 49, 80-99.
<https://dx.doi.org/10.1016/j.ijintrel.2015.06.012>
- Dwyer, M. M. (2004). More is better: The impact of study abroad program duration. *Frontiers: The interdisciplinary Journal of Study Abroad*, 10, 151-164.
- Gaia, A. C. (2015). Short-term faculty-led study abroad programs enhance cultural exchange and self-awareness. *The International Education Journal: Comparative Perspectives*, 14 (1), 21-31.
- Kartoshkina, Y. (2015). Bitter-sweet reentry after studying abroad. *International Journal of Intercultural Relations*, 44, 35-35.
<https://dx.doi.org/10.1016/j.ijintrel.2014.11.001>
- National Survey of Student Engagement (NSSE). (2007). *Experience That Matter: Enhancing Student Learning and Success, NSEE 2008 Annual Report*. Indiana University Bloomington: Center for Postsecondary Research School of Education.
- Nguyen, A. (2017). Intercultural competence in short-term study abroad. *Frontiers: The interdisciplinary Journal of Study Abroad*, 36 (2), 109-127.
- 泰松範行 (2017) 「大学教育における教育旅行の役割と可能性—スタディ・ツアーにおける参加意欲についての検討—」『東洋学園大学紀要』25, 135-143.
- Wang, W. & Zhou, M. (2016). Validation of the short form of the intercultural sensitivity scale (ISS-15). *International Journal of Intercultural Relations*, 55, 1-7.
<https://dx.doi.org/10.1016/j.ijintrel.2016.08.002>